オランダ王国　　派遣期間　２０１３年４月～２０１６年３月

ロッテルダム日本人学校　帰国報告
～現地理解から学ぶ国際理解教育～

幕別町立幕別中学校
教 諭　谷崎　　城

１　オランダの概要

（1）国名：オランダ王国（元首：ウィレム・アレキサンダー国王）
　　英）Kingdom of the Netherlands（俗称：Holland）
　　蘭）Koninkrijk der Nederlanden

（2）国土：ヨーロッパ北西部に位置し、南はベルギー、東はドイツと国境を接し、北と西は北海に面する。
　　（北緯 ５２．３ 度。樺太とほぼ同緯度）
　　面積は４１，８６４㎢で、九州の一回り大きいくらい。
　　（国土の約４分の１が、海抜０ｍ以下）

（3）人口：約１６５０万人
　　ゲルマン系オランダ人８３％，
　　トルコ・モロッコ系移民など１７％

（4）公用語：オランダ語・英語

（5）宗教：キリスト教
　　（カトリック　　２４．４％
　　プロテスタント　１５．８％）
　　イスラム教４．９％，無宗教・その他５３．８％

２．日本との関わり

（1）日蘭交流の幕開け
　　１５９８年、オランダのロッテルダム港を出港した５隻の船団は、日本を目指した。外国船に襲われたり、嵐に巻き込まれたりして、リーフデ号ただ１隻が１６００年に大分県の臼杵に漂着する。これが、日本とオランダとの交流の始まりである。

（2）朱印船貿易
　　当初、リーフデ号は海賊船の疑いをかけられ、乗組員のウィリアム・アダムス（後の三浦按針）やヤン・ヨーステンらは取り調べを受けた。しかし、時の権力者徳川家康に気に

入られ、外交政策の相談役として後に幕府で重用されることとなる。彼らが忠誠を尽くしたことによって、幕府からオランダに朱印状が発行された。

１６０９年、平戸（長崎）にオランダ商館が設置され、ようやくオランダ船が入港し、日蘭貿易が本格的に始まったのである。

（3）鎖国下の貿易

幕府はキリスト教に対する警戒から鎖国政策を進めたが、プロテスタント系のオランダは、布教よりも貿易に力を入れていたため厚遇された。１６３９年、ポルトガル人の来航を禁じる通達がなされた結果、ヨーロッパ諸国ではオランダのみが日本との貿易を継続することとなった。

１６４１年、オランダ商館が出島に移転した。オランダは、自国はもとよりヨーロッパ各国の化学・医学・産物・兵器などを、人工島“出島”を通じて日本に紹介した。オランダ人は、日本にとって世界への窓としての役目を担うようになったのである。

そして、オランダ人によって紹介された西洋の科学や書物は“蘭学”として花開いた。

（4）蘭学の興隆

オランダ語の医学書を翻訳し『解体新書』を刊行した杉田玄白は、蘭学の開拓者の一人と言える。また、シーボルトが始めた長崎の鳴滝塾は蘭学塾として名を馳せ、そこでは西洋医学や自然科学など幅広い分野の講義が行われた。

ポルトガル人が日本から追放されてからは、オランダ語が日本における第一外国語の地位を獲得することとなった。ビール、コーヒー、ガラスなどの言葉は、オランダ語の音をそのまま真似たものであり、オランダの影響が日本人の日常生活にいかに色濃く残っているかを示している。

３．オランダの教育事情

（1）オランダの教育的土壌

① 歴史的背景と英語教育

私がこの国に来て大変驚いたのは、非英語圏の中でもかなり英語が普及しているということである。どこに行っても大抵は通じる。その要因として考えられるのは、オランダが商業立国として貿易を中心に栄えてきたということである。さらには、近年における積極的な移民政策も大きく関係していると思われる。だからこそ、共通言語である英語が普及してきたのであろう。国としても、英語を第２言語として、小学校卒業までに修得させることを目指している。また、中等教育（１３歳～）においては、オランダ語・英語を含めて３～４の言語を学習するカリキュラムが組まれている。

② 国民性

オランダ人を一言で表すなら、『何ごとに対しても寛容である』ということである。これは、“他国で思想・信条を理由として迫害された人々”を受け入れることで繁栄してきたという自負があるためであろう。その「多様性を認める」というのが、オランダの教育の根本にあるように思われる。

（2）教育の自由

オランダでは憲法によって「教育の三つの自由」が保障されている。

『設立の自由』……一定数の生徒を確保すれば、市民団体が学校を設立することができる。

『理念の自由』……宗教色を出しても、他のことで特徴を出しても良い。

『教育方法の自由』…教育内容や教材の裁量権が認められている。

（3）教育制度

義務教育は５歳から始まる。いわゆる“校区”というものがなく、親は子どもに合った学校を自由に選択することができる。義務教育は１６歳に達するかディプロマ（卒業証明書）を取得したら終了する。

① 初等教育（４歳～１２歳）※４歳から入学できる。

基本的な学力の発達を中核としつつ、児童の感情や創造性の発達と、社会的な力を身につけることに重点が置かれている。

最終学年では、ＣＩＴＯテストと呼ばれる全国一斉テストを受ける。この結果をもとに、教師は一人ひとりの子どもの親と面談し、進学するコースのアドバイスをする。

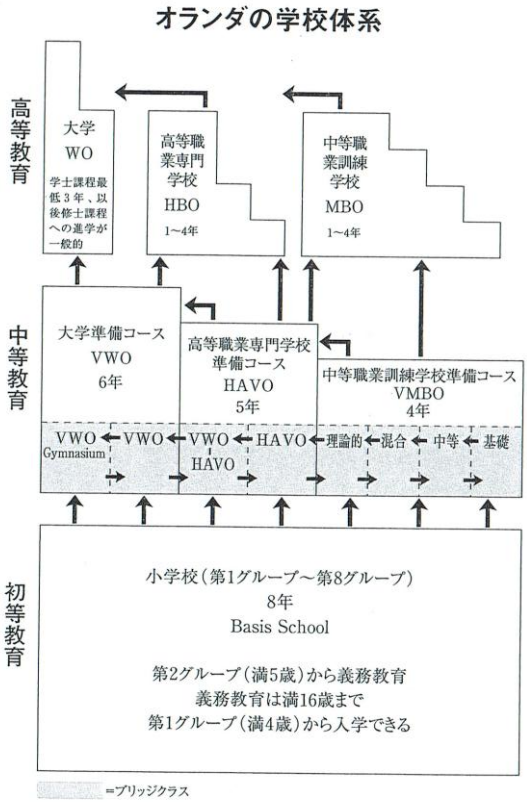
② 中等教育

ア．ＶＷＯ……大学進学コース（６年間）

イ．ＨＡＶＯ…高等専門学校進学コース（５年間）

ウ．ＶＭＢＯ…職業訓練コース（４年間）

主に上記の３コースから選択する。 ほとんどの中等学校では、これらのコースのうち２種類以上を提供している。中等教育の最初の２年間は、隣接するコースにまたがって学ぶことのできる“ブリッジクラス”というシステムが設けられている。



（4）多様性に富んだ教育

オランダでは、オールタナティブ教育（既存の教育に取って代わる別の教育）が広く浸透している。その理由として、先に述べた「教育の三つの自由」が認められているということが考えられる。下記に示したオールタナティブ教育に共通して言えることは、『個性の重視と社会性の尊重』を強調しているということである。

① モンテッソーリ教育

子どもたちが実際に手にとって触ったり動かしたりして、具体的に理解できるような教材を用いている。また、年齢の異なる子どもたちを１つのグループにして指導している。

② ダルトン教育

子どもの自主性が重んじられ、教師は一人ひとりに個別の学習指導を行う。教師と子どもとの約束で、子どもは決められた時までに決められた自分の課題をこなす。

③ イエナプラン教育

教師と一緒に子どもたちが輪を作って話し合う場を大切にしている。子どもたちの活動を＜話す＞＜遊ぶ＞＜働く＞＜祝う＞という４つの基礎的な活動に分け、これらを循環しながらリズミカルに行っている。モンテッソーリ教育と同様に、年齢の異なる子どもたちが同じ教室で学んでいる。

④ シュタイナー教育

子どもの発達は〔頭〕を使った知的な成長に留まるものではないという考えで、〔心〕で感じるものを引き出し、〔手〕を動かして物を作り出す能力を引き出すことを重視している。

⑤ フレイネ教育

子どもたちの自主的な探究心や発見を育てるために、自由作文と新聞作りを重視した教育。戸外に出て、身の回りの世界を批判的に見る心を養う。ダルトン教育同様、子どもたちが自分で時間割を作る。

（5）やり直しのシステム

① 留年

義務教育であっても、留年がある。基準についていけない子どもには、学校側からそのような措置を薦められる。オランダでは頻繁にあることで、親や子どもにとってそれが恥ずかしいという気持ちはないようである。

② 選択

ブリッジクラスにいる２年間は、留年の他に、一つレベルが下のコースで上の学年に進級することが認められている。また、これとは反対に、成績が良ければレベルアップして上のコースに移動することもできる。生徒は自らの意思で選択し、自分の進路実現のための学習を進めていくのである。

（6）教育の方向性～個性の重視と社会性の尊重～

オランダは、マイノリティー社会（多様性）であり、認め合い共存するという意識が強い。オランダでは、１９６０年代から「どう教えるか（Teaching process）」から「どう学びを充実させるか（Learning process）」に方向転換してきた。 つまりそれは、カリキュラムや授業技術といった教授方法から個別の子どものニーズに沿った学習の仕方をはじめとする教育学的環境づくりへの転換であるといえる。

社会のニーズとしては、多様な価値観（異文化）を受け入れ他者と協働する世界市民づくりが叫ばれている。世界市民とは、自分をよく知り、他の国の人を尊重するということである。産業社会では、産業に役立つ人材づくりが中心であった。学校は歯車づくりで、できない子は落ちこぼれとして扱われてきた。しかし、市民社会では、意欲的に社会参加する人材づくりが中心となる。

オランダ人の子どもは、「自分はこう思う」と相手に伝えるという機会が小さい時から与えられている。互いに世の中のことを話したりするので、他の子の考えも知ることができる。また、オランダの親は、日本の親のように子に世話を焼かず自立させている。親として、子どもの好奇心を維持してあげることに努めているのだ。オランダの教師はどうかというと、「一人一人違ってあたりまえ」と思っていて、学校としても

「これでいくんだ」というビジョンをきちんともっていると感じた。
　オランダの子どもたちの自立心は、こういった教育環境によって養われているのではないかと推測する。

４．現地校調査

（１）視察

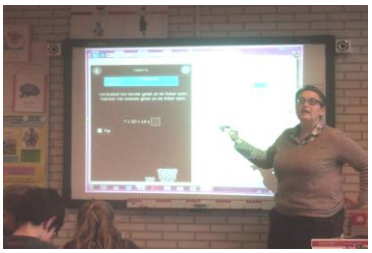
① セントローレンスカレッジ（ＳＬＣ）

　数学の授業を見学した。SMART BOARD という電子黒板に教科書の内容を映し出し、ホームワークの答え合わせ・解説を行っていた。質問のある生徒は、前にいる教師の所に質問に行っていた。教師が板書したものを生徒が書き写すという場面は特になかった。

　一人一人が関数電卓（グラフが描ける機能をもった）を持っており、それを駆使して課題を解いていた。授業スタイルから感じたのは、やはりオランダは個人主義ということである。あくまでも生徒の能動的な姿勢が求められていると思った。

② アンネフランク校

　この学校でも、タブレット教育が大変充実しており、全員が個人用タブレットを持っていた。『snappet』というコンテンツを用いて、算数・つづり・言語といった学習がタブレットを用いて進められていた。教師は、児童の理解度を一目で（各問題で、正解なら緑色、不正解ならオレンジ色といったように）把握することができ、個々に必要なサポートをしたり、自身の授業をフィードバックさせることができる。また、児童たちも、自分がどの部分が苦手であるのかを把握することができ、効果的な学習を進めることが可能であると感じた。



　ＳＬＣ見学でも感じたが、オランダは日本と比べて、ＩＣＴ教育がかなり進んでいる印象を受けた。ＩＣＴ教育の導入によって、児童生徒の主体的な学習活動への参加や、学習意欲・思考力・判断力などの向上に繋がると思われる。

　また、教師の裁量がかなり認められていて、flexible に授業を展開していた。例えば、授業の途中にブレーキングタイムを挟んだり、ダンスをさせたりして飽きさせない工夫が見られた。本の読み聞かせ中に体育から戻ってきた児童は、それぞれ自分の課題の学習を進めていた。その日のうちにやるべき課題をどう取り組むのかは、各児童に委ねられていた。一日の授業の中で、目標を達成できればいいという考え方のようである。

（2）アンケート

アンネフランク校のＧ７（１１歳）とＧ８（１２歳）の児童に、『英語学習』に関するアンケートに答えてもらった。

“英語の勉強は好きですか？”という問いに対し、Ｇ７の児童は全員がＹＥＳと答えていた。「楽しい」という理由以外に、「違う国の人と英語で話したい」という回答が多かった。誰に対してもコミュニケーションを積極的に図ろうとする姿勢の表れであろう。また、“Reading・Writing・Listening・Speaking” のうち、最も簡単だと思うものを選んでもらったところ、“Speaking”という答えが圧倒的であった。逆に、最も難しいと思うものに多くの児童が“Writing ”であると答えていた。日本の子どもたちに、もし同様の質問をしたら、おそらく逆の結果になるのではないだろうか。こちらでは、文法的にたとえ間違っていようが、「とにかく話そう」という意識が高いと言える。

“英語は役に立っていますか？”という問いに、ほぼ全員がＹＥＳと答えていたのには、大変驚かされた。「ゲームをするのに‥」「映画を観るのに‥」「外国の人と話すのに‥」「違う国に行ったときに‥」…具体的にそのような答えがあったが、その“役に立つんだ”という実感が、彼らの英語学習のモチベーションを上げているようであった。

最後の設問は、“英語を勉強することは必要だと思いますか？”であったが、先述の“役に立つ”理由にもあるように、「英語が世界言語であるから」という認識をもった児童が多かった。「世界中の人とコミュニケーションを図れる」ツールとして、英語が必要であると感じているのだろう。いろいろな人と関わりたいという国民性を垣間見られた気がした。日本の英語教育においても、“役に立つ ”という実感が得られるような学びにしていかなくてはいけないのではと強く感じた。

5．現地の人々との交流

（1）語学と興味

オランダでは、日本語を勉強している人が多い。オランダ最古の大学であるライデン大学は、世界で最初に日本学科が設置されたことで知られる。私は、日本語教室や独学で日本語を勉強している現地の人たちと知り合うことができた。

彼らが日本語を勉強しようと思ったきっかけは、日本の文化（アニメ・食べ物・陶器 etc）に触れて興味をもったからだそうだ。語学というのは、単に詰め込みではなく、五感を使って触れることから始まるのだと思い知らされた。

（2）語学と環境

オランダでは、英語字幕がついているテレビ番組が多く、小さい時から英語に触れる環境が整っていると、あるオランダ人が言っていた。日本の場合は、映画をはじめとして、吹き替えが中心であり、英語教育を語る上でその点が大きく異なると感じた。

以上のことから、語学習得の必須要件として“興味をもち、日常から触れる”こと

ではないかと考える。それは、人間関係の構築においても同じことが言えるのではないだろうか。

（3）相互理解

日本語教室で、ある興味深い話を聴いた。それは“日本と韓国・中国との関係”と“ドイツとオランダとの関係”の違いについてである。

日本も、ドイツも、共に第二次世界大戦では他国を占領・支配し、甚大な被害を与え、苦しめた。韓国人や中国人の日本人に対する感情は、承知のとおりだと思う。しかし、オランダ人は憎むべき敵国であったドイツの人々のことをそこまで恨み続けてはいない。

その理由として、あるオランダ人がこう言った。「ドイツとオランダは陸続きで、人の流れが多い。隣の国でバカンスを楽しむことも多い。互いに行き来しているからこそ、変な偏見もなく、ドイツ人の良いところも見えてくる。日本は島国で、韓国や中国との行き来も頻繁にないから、互いに偏見が芽生えたのではないのか。」

相手を理解するには、まず相手を知ろうとすること。実際に接すること。そうしなければ、いつまでたっても心の距離は縮まらないのだと、考えさせられた。

6．ロッテルダム日本人学校での教育活動

（1）学校の概要

① 学校所在

オランダ第二の都市、ロッテルダムの静かな住宅街に位置する。施設をアメリカンインターナショナルスクールと共有している。

② 教育目標

「思いやりのある人」・「よく考え学びあえる人」・「世界に目を開く人」

③ 教育の重点

少人数によるきめ細やかな授業を展開しながら確かな学力の定着を目指し、特に「コミュニケーション能力の向上（日本語、英語教育の充実）」、「現地理解教育の充実（現地校交流、校外学習）」、「キャリア教育の充実（職場体験、進路指導）」に力を入れ、豊かな国際性を身につけた２１世紀を生きる児童生徒の育成に取り組んでいる。

④ 児童生徒数

小学部１９名　中学部３名　計２２名　（平成２７年度末時点）

（2）学校行事

① 運動会

５月に、アムステルダム日本人学校と５つの補習校及び現地校に通う日本人の児童生

徒が集い、合同運動会が開かれる。

ロッテルダム日本人学校は、小学５年生以上の児童生徒による和太鼓演奏を発表している。小学４年生以下の児童は、その太鼓のリズムに合わせて踊りを披露する。

② 修学旅行・自然教室

『実体験を通して、自分たちで考え、判断し、行動する力を身につける 』をめあてとして、小学５年生以上の児童生徒を対象に隔年で修学旅行と自然教室を実施している。

修学旅行では、自分たちで切符を買って電車に乗る。アムステルダム市内自主研修をメインに据えている。その他、チーズ作り体験などを行い、まとめとしてアムステルダムのガイドマップを作成する。

自然教室は、オランダ北部ワッデン海に浮かぶテクセル島で実施される。乗馬体験・エビ釣り漁船乗船体験の他、羊毛フェルトクラフト体験など、児童生徒にとってオランダを“肌で感じる”貴重な経験となっている。

③ 秋華祭

いわゆる学習発表会・文化祭である。低学年によるキッズソーランや高学年以上による太鼓演奏の他、小学部・中学部それぞれ音楽発表や劇の発表がある。

さらには、ロッテルダム日本人学校の児童生徒及び全教職員が一つになり、合唱やＣｕｐｓ等を披露している。

（3）外国語教育と交流活動

① 英語教育

オランダ人講師による英会話の授業を週に４コマ（１コマ＝２０分）実施している。ゲーム的要素を取り入れながら、児童生徒が話しやすい環境を作り出して、レッスンを行ってくれている。また、アメリカンインターナショナルスクールや現地校との交流に向けての実践的な英会話の学習も行われている。

その講師は常に「間違ってもいいから、恐れずにまず英語を話すことが大切だ。」と児童生徒に話している。その甲斐もあり、はじめは消極的だった子たちも自分の伝えたいことを言葉にすることができるようになってきた。

② 現地理解教育

オランダの行事や季節の風物詩を、その歴史などにも触れながら、実際に体験しに行く。オランダ人講師による簡単なオランダ語のレッスンと合わせ、学習を進めていく。

＜ハーリングレッスン＞

ニシン（ハーリング）漁が解禁される６月頃、近くの屋台にニシンを買いに行く。一人ひとりオランダ語で注文し、独特の食べ方で頂く。

＜オリボーレンレッスン＞

オリボーレンとはオランダ風ドーナツのことである。大晦日に食べるのが一般的だが、１２月初めには屋台が出る。ハーリングレッスン同様、オランダ語で注文して買う。

＜シントニコラス祭＞

シントニコラスとは、オランダ版サンタクロースのことである。お供の黒人ズワルトピートを連れて、スペインから船に乗ってやってくる…という設定だ。

１２月４日に人参や角砂糖を用意し（シントニコラスの馬の為 ）、靴を置いておくと、翌朝プレゼントが入っている。ただ、ズワルトピートはいたずら好きで、教室が無残に荒らされるのである。ちなみに、悪い子は麻袋に入れられてスペインに連れていかれるそうである。

③ 交流活動

＜現地校交流＞

低学年ブロック（小１～小４）はアンネフランク校とヒルデガルド校と、高学年ブロック（小５～中３）はセントローレンスカレッジとミチルスクール（養護学校）との交流を行っている。低学年は、日本の遊びを現地の児童と遊び、高学年は、一緒に和太鼓で曲作りをするなど、楽しみながら互いに交流を深めている。

＜高齢者施設訪問＞

隔年で、全校児童生徒がリウマチセンターと老人ホームを訪問している。日本の歌やキッズソーランを披露したり、福笑いや手遊びなど日本の遊びをお年寄りと一緒に遊ぶ。お年寄りとの時間を過ごすことで、情操の涵養につながっている。

＜日本文化紹介＞

隣のアメリカンインターナショナルスクールとの交流である。けん玉・折り紙・福笑いなど、日本の遊びのブースをいくつか設け、アメリカンの児童生徒は順に回ってそれらを体験をするのである。低学年が中心の交流だが、高学年はガイド役としてサポートに回るなど、全校児童生徒で作り上げていく。

④ Warm Heart　の定着

ア．顕在的課題（１年目）

在外教育施設だけに、現地校等との活発な“交流”が一つの大きな目玉になっている。しかし、いくら英語が話せても、いざ交流となると構えてしまって自分から動けない児童生徒が多かった。それに対して、現地校の児童生徒は、参観をしに教室に入ると臆することなく笑顔であいさつをしてくれ、中には決して流暢ではない日本語で「こんにちは」と言ってくれたりした。

交流に際して、言葉という『技能』はもちろん最低限は必要だが、言葉はあくまでも一つのツールに過ぎない。それよりも、『心』の部分が大切ではないだろうかという意見が出た。そこで、オランダ人英語講師の言葉を参考に、交流で必要となるコミュニケーションスキルとして“Warm Heart（＝温かい心）”を合言葉に、全校で授業改善に取り組んだ。

イ．実践と変容（２年目）

“Warm Heart”とは、『Smile』『Welcome＆Thanks』『Compliment』『Show interest』の４観点を指している。それらを表現するために、表情・言葉・ジェスチャーの３つの手段を駆使し、自分の思いを相手に伝えることを交流の目標とした。

例えば、『Compliment』は「ほめる」ことであるが、これは言葉だけでなく表情(明るい笑顔)が伴っていないと意味がない。 また、足りない部分はジェスチャーを使ってオーバーリアクション気味に表現すると相手もうれしいはずである。交流を重ねていくうちに、 前述の４観点について、児童生徒は「できるようになった。」という達成感を口にしていた。

また、使用する言葉を最低限に留め、表情やジェスチャーに重点を置くことで、英語が苦手な子たちも前向きに交流に臨めるようになってきた。そして「言葉が上手に話せなくてもコミュニケーションは図れる」ということに気づくことができたのではないかと思う。それが自信へとつながり、次はもう少し語彙を増やしたいという意欲につながっていった。

ウ．課題（２年目）

交流活動の中の“Warm Heart”は定着しつつあるが、日常生活と切り離れている感があった。日本人どうし、それも身近なクラスメイトとの関わりの中でできていないことも多々あり、交流活動の中の“Warm Heart”も形だけになっていないだろうかという反省が教員間の中であった。

エ．実践と変容（３年目）

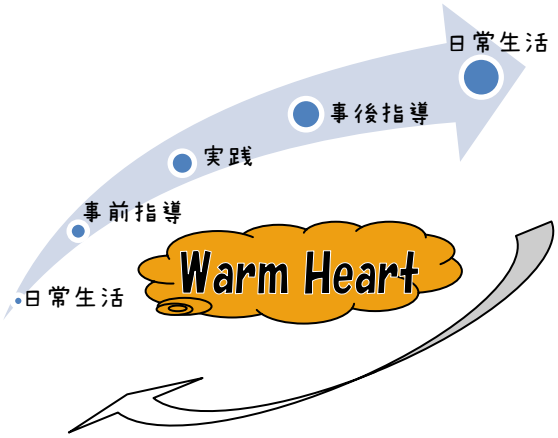
“いつでも　どこでも　だれとでも（anytime anywhere anyone）”を意識させ、“Warm Heart”の日常的実践にポイントを置くことにした。そのために教師サイドで、コミュニケーション能力を高める活動及び学び合いや対話を大切にする学習を意識して組み入れた。具体例として、帰りの会などで学級の友達の頑張りや良かったところを褒める場（Compliment Time）を設けたことで、“仲間を褒める→理由→拍手 ”という流れをつくることができた。また、朝の会で１分間スピーチに取り組ませることで、話を真摯に聴き、共感する態度を養うことができた。

日常的に意識し、実践していくことで、コミュニケーションの楽しさをもっと知ったり、自分に自信をもてるようになったのではと思う。

それを実感したのは、自然教室でのことだ。修学旅行同様、ガイドマップ作成の資料収集として、観光客や地元の人にインタビューをするのだが、そこでの児童生徒の成長ぶりには驚かされた。以前は物怖じして交流の場面で全く話せなかった子が、見ず知らずの外国人を相手に積極的に声をかけ、身振り手振りを交えながら必死に伝えようとしていたのだ。日常の積み重ねがいかに大事かということである。

オ．実践を振り返って

「すべてのことは、日常生活とつながっている」という認識のもと、成功体験を常にフィードバックさせていかなくてはならない。それを繰り返すことで、他者との関わりの中で困難にぶつかった時に、自ら考え、判断し、表現できる児童生徒が育っていくのではと考える。



７．国際理解教育の在り方

国際理解教育とは、決して外国人と関わることがすべてではないとこの三年間で痛感した。最終テーマとしては、「 世界の人々とどのように共存していくのか」を学ぶ学習だと思う。しかし、もっと狭義で考えた時、まずは自分の身近な人々との関わり方について学習していく教育なのではないだろうか。すべてはそこから始まるのではないのかという結論に達した。

これまで、日本での子どもたちとの関わりの中で感じたことは、自己中心的な考えの生徒が目立っているということであった。その一方で、我慢を強いられている生徒がいるのだが、「だめなことはだめ 」と言えない雰囲気が全体に漂っていた。狭い仲間意識もはびこり、親しい友人以外に対して無関心なところが多く見受けられた。言い換えれば、特定の仲間集団の中に安心感を見い出そうとする一方、広く他者と意思疎通を図ることには消極的であるということである。また、やってもらってあたりまえという意識が強く、物事に感謝する気持ちが薄い。決して『思いやり・感謝』がないというわけではないが、人間関係の希薄化や、他人を気遣う時間的精神的余裕のなさ、‘あたりまえ’に浸かりきった生活、さらには素直にそういった感情を表すことの気恥ずかしさ…などといったものがあるのだと思う。

今の日本の子どもたちの多くは、他者との関わり方や自分をどう表現するかについて悩んでいる。しかし、日常から“Warm Heart”を意識させ、主体的に行動する力を培う中で、達成感や自己肯定感を高めることができるはずである。それがまた自信につながり、さらに幅広い人間関係を構築していくことができると信じている。そしていつの日か、一人ひとりが、心豊かな“世界市民”になってくれればと願っている。

「Think globally，Act locally（地球規模で考え、足元から行動せよ）」という言葉がある。まさにこの言葉に尽きると思う。身近なところでの行動を一つ一つ積み重ねていくことが、やがては世界を動かすことになるのではないだろうか。

8．おわりに

オランダでの様々な経験は、私にとって生涯忘れることのない貴重な財産となった。この地で私は“人とのつながり”の重要性を再認識した。私たちとは異なる価値観や文化に触れたことで、物事を様々な角度から見ることの大切さに気づいた。それをぜひ日本の子どもたちにも伝えていきたい。自分の身の回りで、たとえ意見が違ったり性格が合わなかったとしても、互いに違いを認め合い、尊重し合う姿勢を養っていけたらと思う。現代社会では、相手のことを理解せずに排除しようとしたり、避けようとしたりする傾向が見られる。しかし、相手の考えや思いに共感することが、心の扉を開ける一番の方法であると確信している。

数多くの出会いに心から感謝し、このレポートを締めたいと思う。